

ペスタロッチーにおける「人間」について

鯨 坂 二 夫

第1章	人	間
第1節	人間性の尊厳	
第2節	自 発 性	
第3節	自己統合性と調和的發展	
第2章	自	然
終 章		

第1章 人 間

第1節 人間性の尊厳

フリードリッヒ・マン Friedrich Mann によれば、ペスタロッチーはその「隠者の夕暮」を1779年の冬から、1780年にかけて書いている。それは、ノイホーフにおける彼の貧民学校が解散した時か、少くも解散に直面している頃であった。それ故に、彼を支配していた重苦しい気分は、この書の上にも現われている。その意味深い格言のなかに、我われはペスタロッチーの教育体系の計画と解答、即ち、一人の天才的建築家——ただ惜しむらくは彼にはその設計図によって、その建物を完成し得る運命が恵まれなかった——の価値ある設計図にも比すべきものを見出す。この書の著者は、苦難多き労働によって、向上の努力を続ける人類を見た。しかも人類は何ほどの満足をも得ることなく渦んでしまう。そこでは彼は熱情を傾けた忠告を与えて、国民の牧者と人類の賢者に対し、彼らが人間の本質と使命とを探究し、人間の内面性を満たすに必要な真の要求を知るように訴えている。ニーデレル Niederer¹⁾によれば、この書は次のようにその内容の分析を試みることが出来る。

1, 教育の一般的課題。教育者の出発すべき根本動機

- 2, 人間の本質を満足させるための資料と方法の源泉, すべての教育の基礎づけ。
- 3, 教育の目的と範囲。
- 4, 人間の発達における自然の本質的過程。
- 5, 精神的教育, 或は知的陶冶。
- 7, 心の教育
- 7, 家庭教育
- 8, 宗教教育
- 9, 国民的及び公民的教育。

この劃期的と言ひ得る著書の冒頭において、我われは印象的な次の文字に出会う。

「玉座の上にあっても、茅屋の蔭にあっても、その本質において人間たることに変わりなき人間よ。汝は一体、何者であるか。何故に賢者は我われにそれを告げないのか。何故に哲人は人間の本質が何であるかを明らかにしないのか。農夫は牡牛を使役しながら、その性質を知らないのか。牧者はまた自分の羊の天性を究め²⁾ないのか。」彼はその声を励まして為政者をたしなめる如く語りつづけ、為政者がその国民を恰かも牧者が羊に対する如く心を尽しているか否かを問うている。そうして、再び人間本質への深い問を投げかけ、「人間の本質をなすもの、彼が求めるもの、彼を高めるもの、彼を卑しくするもの、彼を強くし、また弱くするものは何であろうか。それはまことに国民の牧者たる者にも、卑しき小屋に住む人々にも不可欠のものである。至るところに人間はこの必要を感じている³⁾」と問うている。

ここには、ニーデレルも言う如く、ペスタロッチーの人間の一般性についての基本理念と教育の根本動機が伺われる。そうして我々のだれもが感ずることは、人間がその本性において平等であるとの信念が、ペスタロッチーにおいて不動であったということである。彼によれば、治者も被治者も人間の本性において考察されるとき、そこに何らの差別はないのである。「すべての人間はその本質において同じである。而して、これを満足せしむるにはただ

一つの道があるばかりである。それ故に純粋に私の本質の最内部から汲みとられた真理は、人間一般に共通な真理となるであろう」人間性に対する徹底した信頼の言葉を我々はここに聞くことが出来る。そうしてこのような人間性の解明を教育の根本動機とした点において、彼の優れた教育実践の知的背景が理解され得る。人間性は平等であり、それは共通の真理を生み出すものであるが、しかし、それは決して先験的な意味においてはではない。「人間は自らの切なる要求に励まされて、この真理への道を彼の本性の奥底に発見する。」「わが救であり、わが本性の完成にまで我を向上せしめる真理よ。如何なる方法、如何なる道において、私は汝を見出すであろうか。わが本性の奥深きところに、この真理への開発の道がある。」⁵⁾というのがその立場であった。深い自覚反省の根底に現在する体験として、自己の根源が体得され、真理への道が見出されるというのである。このような考へ方に対しては、或は人間性をめぐる極端な楽天主義であるとの批判が成立つかも知れない。そして確かにそうなのである。教育の歴史において彼ほどに、人間性への深い信頼を示した人は少ない。しかし、この信頼なしには、シュタンツの孤児院も、イッフェルテンの学園も成立しなかったであろう。あたかも夢見る人の如く、或は何物かに憑かれたものの如く、打続く失敗にもたゆまず、彼を勇気づけたものは実にこの人間性への信頼であった。

「生活の立脚点、人間の個人的使命、汝こそは自然の書である。汝のうちにこそこの賢明なる指導者の力と秩序とが存在するのである。このような人間教育の基礎の上に築かれない学校教育は誤りに染く」⁶⁾「その最内部における人間本質の満足よ。我われの自然の純粋なる力よ。汝は我われの存在にとって祝福であり、決して夢ではない。汝を求め、汝を研究することは、人間性の目的であり、義務である」⁷⁾「人間性のすべての純粋なる浄福の力は、技

第1節（註）

1) Pestalozzi, J.H. Abendstunde eines Einsiedlers, Ausgewählte Werke—S 6~7

2) 3) Ibid—S. 8

4) 5) 7) 8) Ibid—S. 11

6) Ibid—S. 10

巧や偶然の賜物ではない。すべての人間の本質の内部に、それは根源的素質とともに横たわっている。その完成は人間性の一般的要求である⁸⁾」などの言葉は、人間性への深い信頼なくして発せられる言葉ではない。

第2節 自 発 性

ペスタロッチーはルソーと同じく啓蒙期の主知的人間観に反対して、全体としての人間、即ち、知的、情意的、ならびに感覚的存在としての人間を説いた。そうして、これらの諸々の素質の根底に、自ら発展し活動しようとする内面的衝迫、即ち、自己活動性を見た。彼によれば、それは自己の外なる意志や努力ではなく、自己内に固有な意志であり努力である。またそれは外部からの附加や注入によって与えられるのではなく、自己自身の根源的能力の自己発展においてのみ理解することができる。それは明らかに自律的であり、自己法則的であるのである。

このような自発的能力の有機体である人間の中に現われる諸力は、自立的に、その固有の法則に従って内面から発展する。これらの諸力とは、精神的能力、道徳的能力、及び身体的能力である。精神的能力は悟性的概念理解の素質を、道徳的能力は道徳的宗教的能力を、身体的能力は身体的並びに技術的能力を包含する。そうしてこれらの能力を統合する中心能力こそ自己活動性の源泉であり、人間教育の根源力であるというのがペスタロッチーの立場であった。この立場は、ナトルプが説くように、カントの「道徳的本質としての人間は、自己自身の創造であり、自己自ら法則を与え、この自律性及び道徳的人格により、人は決して単に他の目的のための手段としてでなく、自己目的として取扱われべきである」の思想とその根本見解において一致している。ただペスタロッチーにあっては、それはカント的意味において先験的な純粹自我を意味したものでなく、また、単なる五感を意味したのでもない。彼は明らかに人間の、それ自身において不可分的な、精神感覚的な全体を把握しようとしていたのである。換言すれば、ペスタロッチーにおける自己活動的人間は、決して抽象的な人間でなく、具体的経験的人間を意味し

た。彼は従来の教育のように一つの理想的人間を想定し、その概念を児童に適用し、それに従って教育することを欲せず、却って児童の能力の中に存するものを児童において実現しようとしたのである。彼にあっては、教師とはソクラテスの意味において、児童の精神的自主性、人間的個性の助産婦として考えられたのである。従って教師の第一の役割は、子供に対して、人間的能力を与えるに先立って、外的な強制が人間本性の内的発展力を阻止しないように、或は、人間の本性に固有な能力の発展が、自己自らの法則に従ってその道行を見出すように配慮することであった。「人間の陶冶は窮極において自らの力の自己発展に外ならない。それは決して外的な事物、或は、他人からの形式の分与、強制ではない。事物は彼に加工さるべき素材以外の何物をも与えない。他人の助力は、自助への単なる助力であり得るのみである」⁹⁾

また、ペスタロッチーの教育思想の奥底に見られる道徳や宗教の境地も、自発性の立場から解された。彼によれば人間は自己内部への深き直観により、即ち、自己自身の自己活動によって神を見出すのである、したがって宗教の本質は自己自身の内的判断によって現らにはなるものとして解された。それ故に人間は彼が人間を、即ち、彼自身を知る限りにおいて神を認識するのであり、神は人間にとっては、人間によってのみ、人間の神であり、「神の信仰は人間性の純粹陶冶への自然の道であり、人間性において、その本質に刻みこまれているのである。善悪に対する感覚の如く、正、不正についての消し難い感情の如く、それは人間教育の基礎たる私の本性の内部に不変的に存在する。」¹⁰⁾のであった。ナトルプは自発性の根底に感情をおき、そこに宗教的人間性を根拠づけているが、¹¹⁾ペスタロッチーにあっては自発性それ自身が宗教的道徳的であったのである。

またペスタロッチーの方法をして教育史上劃期的ならしめた直観の原理も、自発性を核心として考えられた。彼が陶冶の基礎としての直観を説く場合、認識する存在としての人間は、単に精神的でもなく、また、感覚的でもない、精神感覚的な存在としてうけとられた。直観は一面において感覚的であるとともに、他方、自ら法則を与えるものとして自律的精神をもたなければ

ばならない。認識構造の基礎は自己活動的精神の中にある。教授の形式は、人間精神の普遍的根拠の上に基礎づけられる。悟性は感性が自然から受容したものを、その統一の表象に、即ち、或る概念に把握する。あらゆる言語、数量は、豊かな直観によって産み出された悟性の成果である。このようにして、自己認識はすべての人間の教授が出発しなければならない所の中心である。ここに言う自己認識とは、本質的に自己の物理的本性の認識、並に、その内面的自律性の認識、自己の意志、及び義務の意識、それ故に道徳的自律性の意識が意味されている。そうして、このような感覚的なものと精神的なものとの調和統一は、人間本性の本質的要求であると解された。このようにして、始めて具体的な認識を生じ、直観により自発性の原理は具体的行為、現実的作用の原理となるのであり、この直観の統一の中心こそ「汝自身」であったのである。

ペスタロッチーの教育は、人間の諸々の能力から生じ、生命ある、創造的な、換言すれば、自己活動の人間、調和と統一のある、自己自身の法則に従い、内面から発展する人間を目指していた。彼にあっては人間はそれ自身自発的であり、方法は人間の外にあるのではなく、彼自身の中にあり、彼自身こそあらゆる認識の中心点であった。それは道徳的宗教的立場においては愛・感謝・信頼としてあらわれ、知識の立場においては認識或は理性能力として現われる。ただ自発性は、それ自身として認識し得るものではなくして、真の自発性、真実性として人間性の根底をなすのである。それは知識がそこに於て成立つ信仰でもあり確信でもあった。

第3節 自己統合性と調和的発展

自己統合性。自己活動性、或は自発性は、その活動の中心点を何処に見出すであろうか。「隠者の夕暮」にも「人間よ、汝自身、汝の本質と汝の諸能

第2節（注）

9) Natorp, P. Pestalozzi, Sein Leben und seine Ideen 1927—S. 42

10) Pestalozzi, J.H. Abendstunde eines Einsiedlers, Ausgewählte Werke—S. 15

11) Natorp, P. Religion innerhalb der Grenzen der Humanität—S. 35~39

力の内的感情は教育する自然の最初の主題である¹²⁾と述べ、内的感情を人間陶冶の基本課題として把握し、「より近き関係の教育された力は、より遠き関係のための人間の知恵と力との源泉である¹³⁾」として、近き関係の根源性を説いている。そうして、この近き関係のうち、最も近い関係は人間の自己自身に外ならなかった。「ゲルトルートは如何にしてその子らを教うるか」においても、「人間本性の発展が、それに従うところのすべてのこれらの法則は、その全範囲において一つの中心点に輻合する。それは我われの全存在の中心点に輻合し、そうして、この中心点は我われ自身である。友よ、私の存在、私の欲するもの、また私がまさにあるべきすべては、私自身から生ずる。私の認識もまた私自身から発すべきではなからうか。¹⁴⁾」と述べ、諸々の関係、諸々の力が、自己自身に最も近き関係、即ち、彼自身に輻合するという立場を強調した。とくに、方法や直観において、この原理はその意味を明瞭にする。即ち、「メトード」において物的・自然的機制の法則として、

第1に物的遠近の法則が人間の直観、その職業の発展、人間の徳性のあらゆる特質を決定すると主張し、

第2に、この物的遠近の法則が、人間の全存在の中心点に集中し、この中心点が汝自身であると説いている。

また、自己に発し、その最も近き隣人関係としての家庭——それは社会の基礎でもある——を第一の、かつ、最も優れた自然関係であると見るのも、この一切の中心を自己と見、一切が自己に輻合するという立場のあらわれと見てよい。宗教について語る場合でも、また、そうである。即ち、「神は人間に最も近い関係である¹⁵⁾」のであり、また、「人間よ、汝自身を信ぜよ、汝の本質の内的意味を信ぜよ。さらば汝は神と不死とを信ずるであろう¹⁶⁾」であった。人間が自己自身を信ずる時、絶対者を知るというペスタロッチーの神秘主義的思想は、人間の自覚が、神の自覚に、道徳的世界が宗教的世界に直結すること、その同一化、同一性を提唱しているものと理解してよい。そうして、それは一つの原理、即ち、人間性の統合の原理の示唆であると解されよう。

調和的發展。自発的人間本性のなかに、ペスタロッチャーは調和的發展の可能、統一、秩序を見ようとする。彼においては、陶冶の合自然性は三つの根源的能力、即ち、道徳的能力、知的能力、身体的能力が相互に緊密に結合し、相扶け、支持し合いつつ調和的に發展することを予想する。知的能力と道徳的能力は、互に内面的能力として結合し、これと外面的活動性としての身体的能力が調和的に結合するものと考えられ「白鳥の歌」¹⁷⁾における諸力均衡の原理の立場があらわれる。この書のなかで、基礎陶冶の理念について論ずる時のペスタロッチャーの見解はつぎのようである。

人間の本性は何か。まず彼はそれを問う。人間の本性の固有の本質、その特徴を探究しようとして、それを他の生物との比較において、即ち、人間の本性を他の動物の具有しない本質や能力、たとえば肉や血や情欲でなくて、人間的心情の素質、人間的精神、人間的技能において人間の本質を形成するものを見ようとした。従って、基礎陶冶の理念は、この人間的心情、人間的な精神、人間的技能の能力や素質の合自然な開発にかかわる理念として考えられた。そうして、彼は、動物的な本性の要求を、この心情、精神、技術などの素質のもつ内面的本質、神的本質の崇高な要求に従属せしめることを要求している。それに加えて、これらの三つの諸能力の基礎の一つの生気にみちた内的感情を予想している。そうして、これこそ永劫不易な法則に基づいたもの、或はそのあらわれとして考えている。しかも、これらの諸々の力の一つの共同能力として把握さるべきことを述べ、「人間本性を、この共通能力において、即ち、心とし、精神とし、手として理解するもののみが、真に人間を合自然に陶冶する」と述べている。もし、これらの諸能力が、単にその一つにおいてのみ、把握されるならば、諸力均衡の力を失い、陶冶は極めて不自然なものになってしまう。我々の諸能力の一つの、一面的な開発は、決して真実な合自然的な陶冶ではない。「真実の合自然的陶冶はその本質において人間の諸力の完全性の努力にまで導く」というのが、彼の立場であった。

それでは、如何にして道徳的生活の基礎、即ち、愛と信仰とが合自然的に陶

治されるであろうか。この間に対するペスタロッチーの解答は「母の力」と「母の誠実」とであった。物的にも、また、精神的にも、最初の平和は母の神聖な配慮において成立つ。その配慮の如何によって、父親の力のもつ働きも、また、兄弟姉妹のもつ教育的な意味も、家庭生活に存在する教育的祝福も、芽生えたり、涸んだりしてしまう。しかも人間性の本質は実にこの平和においてのみ発展する。母親は、しかし、単に盲目的にその子に奉仕するのではない。賢明にして思慮深い母親は彼女の愛の奉仕において、子どものために生活する。かの女は子どもの気紛れや動物的な我儘には決して奉仕しない。このよにして、子どもは母の愛するものを愛し、母の信ずるものを信ずるに至るであろう。感覚的、人間的にも、また、神的宗教的にも、子どもは母の言葉を信じ、その母の手において、子どもは合自然的に感性的な信と、感性的な愛から、人間的な信と愛に、更に、真のキリスト教的信と愛にまで高められるのである。基礎的陶冶の理念が、子どもの道徳的宗教的生活を、その揺籃から人間的に基礎づけようとするのは、この方法によってである。ペスタロッチー晩年の作である「白鳥の歌」に見る母親の教育的立場の重要性は、すでに「隠者の夕暮」以来の彼の教育思想の立脚点であった。

つぎに、人間の精神生活の基礎、その思惟能力、熟慮、討究、判断などの基礎は如何にして合自然的に我われの本性において発展するのであろうか。この第2の課題に対してはペスタロッチーはつぎのように答えようとする。即ち、我われは我われの思考力の陶冶が、あらゆる対象の直観が我われに与える印象から出発することを知っている。それらの対象は、それが我われの内的及び外的な感覚に触れる時、我われの精神力に内在する本能を自ら開発するように刺激し鼓舞するのである。思考能力の自己本能によって鼓舞された直観は、その本性上、直観の対象が我われに与えた印象の意識を、そうして、それと共に、対象そのものの感性的認識を完成する。この直観は、つぎに、直観の印象が我われに与えた表現の要求の感情、なかなづく摸倣の要求の感情、また更に、言語能力の要求の感情を生み出す。即ち直観から出発する知的陶冶は、合自然的な言語教授においてその最初の助けを求める。知的

陶冶は、更に高度の基礎を要求する。それは直観によって認識せられ、それ自身において明瞭な意識にまでもたらされた諸々の対象を自ら結合し、分離し、比較し、それらの対象の本質や性質を、真実な思考能力にまで高める諸能力の合自然的な開発への技術的手段を要求する。知的陶冶、並びにそれに依存する人間の教養は、人類が数千年来認識し、利用するにまで至った我われの思考能力、探究能力、判断能力の合自然的な開発への論理的な技術手段の絶えざる完成を要求する。そうしてこの直観によって認識された対象を論理的に加工する能力は、まず、計算し、測量する能力において最初の萌芽を見出す。数の教えと、形の教えがそれである。彼はこれをブルグドルフにおける最初の実験に於て成功したと語っている。

ペスタロッチーは更に続けて問う。第3に人間の精神の所産を外部に表現し、人間の心情の本能に外部的に効果と効力とを与えるところの技術の基礎は如何にして発展するであろうか。そうして、つぎのように答えようとする。この技術の基礎は内的であると共に外的、精神的であると共に物的である。また、あらゆる技術能力、職業能力の完成の内的な本質は、人間自然性の精神能力の完成、直観能力の合自然的な完成から生ずる思考判断の能力の完成によって成立する。基礎的に仕組まれた形の教えは、その性質上技術能力の特有な精神的（知的）な技能と見られるように、外的な技術の熟練の達成に必要な感覚や手足の機械的な練習は、反対に、技術能力の物的な技能と考えられる。技術能力——職業能力はこの能力の単に特殊な個人の身分や境遇に応じた応用と見做される——の基礎的な達成は、このような二つの本質上異った基盤に立つのである。ここで注意しなければならないことはつぎのことである。即ち、感覚や手足を使用しようとする自然の衝動は、本質的に動物的、本能的に触発されるが、その本能的な触発を道徳的、精神的な基礎の法則の下に従属せしめようとしていることである。ペスタロッチーに於ては精神的（知的）なものと物的なものとが並び用いられている。しかし究極において精神的なものの優位が主張し続けられ、物的なものは否定されはしないが、下位的存在として扱われている。

「ゲルトルートは如何にしてその子らを教うるか」においても、「自然は本来的に盲目である。それ故に、自然は洞察にみちた精神的道徳の人間の本性とは調和し得ず、また調和しようと試み得ず、調和し得ることの不可能な自然である。反対に感覺的な自然と調和し得る境地にあって、調和し得る能力をもち、また、まさになすべき義務のあるのは却って精神的道徳的自然である。我々の感性の法則は、我々の自然性の本質的要求に従って、道徳的精神的生の法則の下に従わせられなければならない。人間はその精神的内面的生活によってのみ人間それ自身であることが出来る。彼はそれによってのみ自律的であり、自由であり、満足である。感覺的自然は人間をその境地までは導かない。感覺的自然はその本質においては盲目であり、その道は暗黒の道、死の道である。人類の陶冶と指導は、盲目的な感覺的自然から、また、その暗黒と死の影響の手から奪いとり、我われの道徳的精神の本質の手に、また、その聖なる永劫の、内的光明と真理の手に置かなければならない」と説かれている。

人間を精神的能力、心情能力、技術能力の全人格的統合に於て見ようとし、その諸力の根源をそれぞれ特殊な基礎におこうとしたペスタロッシーにあっては、人間は常に一つの具体的全体、物心相即の全体として把握されていたことを、そうして、その際、物的なものは、精神的なものの下におかれていることを見た。教育の対象としての人間を単にその精神的、価値的側面においてのみならず、明らかに物的、自然的存在として見る面を伴うところに彼の教育思想の具体性と調和性が残される。

このような人間観が、更に一層段階的展開の道程を経たものとして、我々は1797年の「人類発展における自然の道行についての¹⁹⁾討究」を見ることが出来る。ペスタロッシーの著書中最も哲学的であると言われるこの著において、彼は人間の発展の道行を三つの段階で考察した。それは自然的段階、社会的段階、及び道徳的段階である。そうしてこれらの三つの段階に即した真理と正義とが論ぜられる。即ち、第1の自然的段階に於ては、真理はこの世のすべてを自己のために奉仕させようとする利己的な原理である。第2の段

階の社会的真理とは、この世のすべてを人類相互の契約関係に於て見ようとする社会的、功利的原理である。そうして、第3の道徳的真理は、前2者と無関係に、万物を自己内面に純粋化する契機として見られている。この三つは段階が融然と一体化されたところに、人間の現実相があるというのが彼の立場であった。自然人の生活は感覚的本能的であり、社会人の生活は外面的強制の生活であり、道徳人の生活こそ自己自身の生活であり、自己完成への希望と努力の生活である。即ち、ペスタロッチーによれば、人間の意志の自由により、人間の動物的本性の調和の根底を向上し、人間の意志の自由を動物的我欲から要求することを完全に放棄することにより人間は道徳的であるのである。「道徳性により、私は私自身を最高なるものに高め、自己の本性を完成に導き、子供にも似た無邪気さ、または、神の如き力、神の恵みにまで至らしめる。教育や律法は動物的好意を家庭生活を通じて人間的 好意 に 変じ、更らに社会的状態の要求する真実と信仰とを通じて、これを保持しなければならない。そうして最後に、没我克己によって無垢の本質を再び自己自身の中に打立て得る力にまで高めなければならない」²⁰⁾しかし、純粋な道徳的状态は人間の根源的要求から出て、理想として希求される状態であり、それは人間において具体的に実現することはむづかしい。人間は常に社会的状態の暗黒によって悩まされるのである。ペスタロッチー自身このことを「純粋な道徳性は、動物的、社会的、道徳的能力が未だ分離せずに内面的に織込まれている如く見える私の本性の真理性に²¹⁾対し矛盾する」と述べている。このような、純粋に魂の内部に起る過程としての道徳性は、永遠の生成であり、所与でなく課題である。そうして、この課題は人間が中間的存在²²⁾であることによって必然的である。デレカートは巧みにそれを教えている。即ち、ペスタロッチーの理性、自然、自我、精神は、半面においては形而上学的に、他の半面においては心理学的に解される。そうして、自然の客観的合目的性は、その形而上的立場にあっても、また心理的立場にあっても、それは同等であるとして扱われる。もしこの合目的性を見出そうとする人は同時に二つの道を歩まなければならない。それは互に遠く離れていても、同一の

目的に終るものである。前者は「私の本性の奥深きところに、この真理への開発の道がある」に見られる立場であり、後者は、「リーンハルトとゲルトルト」に見られる「人は、もし生の全体を理解しようと欲するならば、自己自身を知らなければならない」の立場である。この二つの道の上に、ペスタロッターの「生活は陶冶する」が成立する。

彼は、人間の社会的状態が道德の世界を暗くするのに反し、人間の自然的状态は道德的状态と調和し易いと考えている。彼は言う。「私は、私自身の力によって道德的になり得るのである。私の利己が、私の好意と調和することとは、私の心情を導いて道德を私の性情に可能ならしめることである」と。そうして、それを可能ならしめる最高のものが宗教であった。言いかえれば、道德の行手に宗教が存在した。その場合、彼は必らずしも宗教と道德との関係を明らかにするという態度でなく、むしろ道德と立法との関係を論じて道德の章を結んでいる。彼の説くところによれば、国民の道德は常に立法的知恵、即ち、権力を正義に、利己性を好意に従わせる立法的知性の結果に基づくのである。これに反し、国民の不道德は常に立法の誤りの結果であると解された。また、道德性の発展に対する作用の面では、義務の観念よりも、むしろ人間に感覺的、動物的に近く存在するものの方が切実である。たとえば、父としての義務の観念よりも、子どもたちの微笑や涙が、人間の道德心を増進するのであり、純粋な政治の根本原理が社会の硬化から人間の心を保護するのでなく、人間により感覺的に近く存在する社会の喜びや悲しみが、それを保護するのであり、権力から導かれた結果としての社会的義務の観念よりは、むしろ人間の自然性から生ずる素朴な好意こそ道德性を増進させる、というのが、社会的、国民的道德の源泉についての彼の見解であった。

宗教と道德との関係についての明快な推論を欠いた点に批判の余地を残しながら、しかし、我われはここにペスタロッターの一つの根本原理——物的遠近の法則が堅持されていることを知ることができる。隠者の夕暮のなかに「より近い関係の教育された力は、より遠い関係のための人間の知恵と力との源泉である」²³⁾「父の家よ、汝こそは道德と国家との学校である」²⁴⁾「人間

の家庭的関係は、第1のかつ最も勝れた自然関係である²⁵⁾と説かれ、また「ゲルトルートは如何にしてその子らを教うるか」にも「子どもの最初の教育は、決して頭のことではなく、理性のことでもない。それは永劫に感覚のことであり、心情のことであり、母のことである」²⁶⁾「人間の教育は、ただ徐々に感覚の修練から判断の修練へと進む。それは理性のこととなる前に、永らく心情のこととして続き、男性のことになりはじめるに先立って女性のこととして続く。」²⁷⁾と述べられている。また、その遠近の法則の基礎的關係として、幼児と母との間に存在する自然関係、即ち揺籃の中からの教育をとりあげたことを、我々は同じ書の第14信の中に読みとることができる。

第2章 自 然

ペスタロッチーの多くの著作のなかで、我われは、しばしば「自然 Natur」という文字に触れる。たとえば「自然の道」Der Weg der Natur「自然の書」Das Buch der Natur「自然の力」Die Kraft der Natur「教育の合自然性」Die Naturgemässheit der Erziehung「自然の模倣」Die Nachahmung der Natur「自然の陶冶」Die Bildung der Natur などのような、いろいろな形において「自然」という言葉が用いられている。それは、多く、我々が目に見、耳に聞く感覚的自然である場合が多く、またしかし時として人間の自然性、本性というような価値や理念を含めて語られる場合のあることも見

第3節（註）

- 12) 13) Pestalozzi, J. H. Abendstunde eines Einsiedlers, Ausgewählte Werke—S.13
- 14) Pestalozzi, J. H. Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, Ausgewählte Werke—S. 185
- 15) 16) Ibid—S. 17
- 17) Pestalozzi, J.H. Schwannengesang, Ausgewählte Werke
- 18) Pestalzzi J.H. Wie Gertrud ihre Kinder lehrt—S. 258～259
- 19) 20) Pestalozzi, J.H. Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, Ausgewählte Werke
- 21) Ibid—S. 169
- 22) Delekat, F. J. H. Pestalozzi 1926 S. 110～111.
- 23) 24) 25) Pestalozzi J. H. Abendstunde eines Einsiedlers—S. 13
- 26) 27) Pestalzzi, J. H. Wie Gertrud ihre kinder lehrt—S. 287

逃せない。この「自然」をペスタロッチャーが、どのように理解し、どのように用いたかを尋ねることは、彼の教育思想を究めるための一つの方法であろう。

教育史上、自然を重視した人々の中で我われはルソーとコメニウスの名を忘れてはならない。コメニウスの自然は外的自然を意味した場合が多く、その場合、人間は自然の傍観者、或は通訳者の立場において考えられた。客観的自然主義の名のあるゆえんである。これに対し、ルソーの自然は主観的であると言はれる。それは人間自然の衝動、人間の本性、或は神の別名とも解された。ルソーの自然が理想としての自然であったと言はれるのもその故であろう。ペスタロッチャーの場合は、前二者とおもむきを異にする。それは極めて具体的、現実的な「自然」であり、それが人間の自然性という形に用いられるときには、精神感覚的な人間本性として、超越的なとともに内在的なものとして扱はれている。また、ルソーにあっては自然と文化とは対立関係におかれ、互に排斥するものとして考えられたのに対して、ペスタロッチャーに於ては文化は必然的に自然を根底とし、また自然は文化によってその実を結ぶものと解されている。このような「自然」の名のもとに、ペスタロッチャーは何を意味し、理解し、表現しようと試みたであろうか。

「基礎教育の理念に関する見解と経験」の中で彼はつぎのように述べている。「それを通じて子どもが愛と活動へと刺激され、目覚まされ、陶冶さるべき最初のものとして父母が与えるこの世界において、子どもの感覚を触発する全自然界、即ち、一切の生物 *die belebte Natur* 及び無生物 *die tote Natur* が直接に結合する」²⁸⁾「人間の本性 *Natur* の崇高なる感情が、母親の誠実と父親の配慮とによって深く基礎づけられた子どもは、すでにそれだけでも善良であり温和である。そうして、更に自然 *Natur* の印象、即ち、神の御業である天と地の状態は一層彼を温和にする」²⁹⁾「自然 *Natur* は、母親の誠実と愛情とによって温和にされ崇高にされた子どもに対し彼の中に存在する愛と実行力とを刺激する」³⁰⁾

ここに語られた自然という言葉は、一つの例外——「人間の本性の崇高な

る感情」——を除いて、すべて単なる自然を意味している。そこでは生物界、無生物界即ち、自然界の一切を、すべて自然 Natur の語のもとに包含している。ペスタロッチーがこの書簡で述べる児童教育の環境は、まず第一に人間の世界であった。特にその両親及び縁者が最も近きものとして挙げられ、続いて子供が親と共にその中にいる隣人、社会の人びと、種族にまで及んでいる。そして、自然は第2の環境である。自然は第1の環境である人間と直結して人間関係の基礎である父母の愛育の賜物としての子どもの愛と実行力とを触発する力をもつものとして考えられている。教育に対する環境のもつ意義を強調したものと了解すべきであろう。しかし我われはつぎのような彼の特殊な考え方を見逃してはならない。それは、このような神の業としての自然も、もし子どもが両親の愛育において不十分な場合には、ほとんど何の影響力をも有ち得ないという考え方である。環境の中で、とくに人間は環境、なかなずく父と母と子とのつながりを基礎的と考え、そこに環境の与える影響力の最大の鍵を与えたところに彼の教育観が現われる。即ち彼は言う。「愛がその父母によって眼覚まされない子どもにとっては、すべての世界観はただ動物的である。このような子どもは愛を装うのみで真の愛を有たない。その装いもまた動物的であって、彼の特徴である世界観とも一致する。³¹⁾」「このような子どもに対しては、生物界がその愛と実行とを確実にする影響力を有たないように、無生物もまたこのような子どもに対し、印象を与えることは不可能である。³²⁾」と。

このような自然と人間との教育的関係をさらにより方法的に明確にしたものがその著「メトーデ」である。「メトーデ」において「自然はまことに人間に対し大いなる働きをする。にもかかわらず我われはその自然の道からかけはなれている³³⁾」と言ったペスタロッチーは「自然そのものの直観は、人間教授の真の基礎である³⁴⁾」と言い切っている。そうして「自然は人間の境遇と要求と関係とを通じて、認識の感性的基礎と、その職業の基礎と、さらに道德の基礎とを築きあげる³⁵⁾」と説いている。ここでは人間教育における自然の能力、作用、影響力が語られ、その際、人類数千年の経験が、人間に言語と

描画と書き方と数え方と測定の術を通じ、自然のこの影響力を強め、それによって自然的機構の法則が調和的に人間に把握されると教える。ペスタロッチによれば、人間をとり巻くすべての事物の自然的遠近の法則が人間の直観と職業の発展と人間内面の道徳性におけるあらゆる特質を決定するのであり、しかも、この自然の法則も、人間の全存在の中心点」即ち「汝自身」に集中するというのである。また、自然の機構は、これを全体として見るときは極めて高遠であり、しかも同時にその過程は単純であると説く。恰も巨木の種子から、小さな芽が萌え出でて、人目には分らない成長によって幹の基礎、小枝の基礎が現われ、遂に末枝を出すように、大自然が如何にその個々の部分を培い、保護し、新しい部分を古い部分の確かな生命に結びつけるかを参考にせよと教えている。即ち、彼は感性的な人間性の機構は、その本質において自然が一般にその力を伸ばすのと同じ法則に従うと考え、そのことによって、教授の基礎においても、人間が暗い直観から明晰な概念に到達する機械的法則に従うことを信じ「私は自然に従う」と卒直に告白した。

ここに語られる自然 Natur は、すべて感覚的に我われの眼前に存在する自然である。そうしてこの自然のもつ法則に従い、自然に倣うことは、いわゆる合自然の方法の第 1 の意味であった。「隠者の夕暮」において彼が書き残したつぎの文字は、この意味の自然と人間の陶冶との関係を如実に示すものであったと言える。「自然の力 Die Kraft der Natur」³⁶⁾は、抵抗し難い力をもって人間を真理に導き、その導きには何らの頑迷さもない。鶯の聲が暗らい闇の中に響けば、すべての自然物は気持ちいい自由のなかに動き立ち、抑圧するような秩序の黒い影は、何処にも存在しない」³⁶⁾「自然の軌道」Die Bahn der Natur から逸脱したものとしてあげ得るのは、人間の能力を、かたくなな教師の意見に従わせること、流行の教育法の小技巧を用いることなどであり」³⁷⁾「それ故に自然の教育法 Die Lehrart der Natur は抑圧的ではない」³⁸⁾「人間教育における自然の秩序 Die Ordnung der Natur は人間の認識の素質、天賦の才能を応用し、実行する力である」³⁹⁾「人間よ、汝自身、汝の本質と汝の能力との内的感情は陶冶する自然 Die bildende Natur にとつ

ては最初の主題である」⁴⁰⁾「汝は地上に自己一人のために生活しているのではない。それ故に自然 Natur は汝を外部的関係のために、また外部的関係によって教育するのである」⁴¹⁾「自然の気高い道 Die Erhabene Bahn der Natur は真理に導く道であり、その真理は人間本性の力であり、陶冶であり、充実であり、情調である」⁴²⁾「生活の立脚点、人間の個人的使命よ。汝こそは自然の書 Das Buch der Natur である。汝のうちにこそ賢き指導者の力と秩序とが存在する。かかる人間教育の基礎の上に築かれないすべての学校教育は誤りに陥る」⁴³⁾

ペスタロッcher は、しかし、自然の名のもとにこのような意味だけを見ようとしたのではない。ペスタロッcher の自然は、人間の本性——単に理性だけでなく、感情や宗教的領域にもひろがる人間性の豊かな、調和的な、発展的な成長の過程を含んだ自然でもあった。「隠者の夕暮」の中でも「人間性の純粋なる陶冶である自然の力よ、汝は何処にあるか」⁴⁴⁾「最も深きところに於ける人間本質の満足よ。我われの自然の純粋な力よ。汝こそは我が存在の淨福であって、それは決して夢ではない」⁴⁵⁾「我が本性（自然）の奥深きところに、真理への開発の道がある」⁴⁶⁾「我が教えであり、我を我が本性（自然）の完成にまで向上せしめる真理よ」⁴⁷⁾「神の信仰にまでの自然の教育」などの如き個所に見られる自然 Natur の含む意味は、みなそのような響きを我われに与えずにはいない。その響は感覚的自然と人間の本質としての理念を含みもった自然との具体的統合調和に導く自然の調べである。しかも彼にあっては感覚的自然はその感覚性の故に決してより低きもの、より卑しきもの、或は、より無価値なるものとして捨て去られることはない。感覚性はそのままに、その純粋性において直ちに理念的なるもの精神的なるものに調和し統合されるのである。カントの倫理学においては自然的衝動は道徳的法則性と相矛盾するものとして対立させられた。また多くの倫理説において我われはこのような対立の姿を見ることが多い。しかしながら、ペスタロッcher における自然は、感覚を含みもちつつ、極言すれば、本能や感覚そのものでありつつ、すでに理念的なるものとの統合を示唆する如き実在として考

えられる。一切の道德性、一切の陶冶の根源力は、この自然を基盤として極めて弾力的に発展するのであって、自然は母性的性格をもたされたまさに産みつつある自然として考えられたのであった。愛と信仰との宗教的本質もその萌芽をまた自然において育まれるのである。

このような立場は、或は自然の理性化、内面化、精神化として理解される。その際注意しなければならないことは、それがなされるのはある先験的超越的な原理によってではないということである。彼岸から此岸に架橋がなされるのではない。彼にあっては、あくまでも此方の自然から、その合自然性によって、理性の彼方に橋がかけられるのである。その際、自発性や直観が方法の媒介にはなるであろう。しかし、その何れもが自然の根源力によって支えられている。すべて合理的なるものと、非合理的なるものとが、自然の中に包含される。ペスタロッチーが自然の模倣と言ひ、自然の機制、機関という時、それは単なる自然の模倣や機関を意味したのではなく、常に内部に創造的根源性を含みもっていた。模倣とはその根源性の合法的発展の可能を含む自然の模倣であった。模倣とは自然の合法性に一致することであり、所与の中に本質をうつすことに外ならない。そうして、その作用が自発的であり、その作用の仕方は直観的、その作用の法則は合自然的であると説かれ、また作用の発展の方向は、その本質の内的必然性によって調和的統一的であると解されたのである。それが精神感覺的調和と言はれる場合でも、また、頭と心と手の統合、或は、精神的、心情的、技能的なものの融合と言はれる場合でも、常に内的な統一性を含蓄することに変りはない。そうして、このような統一性を平衡というのは決して無理な表現ではない。合自然性の法則は、諸力均衡の原理なのがある。この原理はルソーの説いた自然の中にも読みとれた。しかしルソーの場合はペスタロッチーに比べて未だ原始性を脱し切れなかったと言うべきであろう。この意味でペスタロッチーの自然は、ルソーの自然の発展の高き段階と考えることもできよう。この際、高いとは、具体性と方法性を含むことの異った表現であって、彼が合自然、平衡の原理をメトードの中心においたのも、それが自発性、直観、方法を通じ

ての具体的方法であったからである。

ここに、コメニウスの自然とペスタロッcherの自然との間の相違が見られる。コメニウスは神の中に個人を見た。ペスタロッcherは個人の自然性、その本性を通じて神と神性とを見た。コメニウスの神は彼岸にあり、人間に対して超越的な、仰ぎ見るべき神であった。ペスタロッcherの神は人間に最も近い隣人的存在であった。コメニウスは人間存在に対し、目的超越的な神を説いたのであったが、ペスタロッcherは根源的な自己の内面において神の姿を把握しようとした。神に到ることがコメニウスの教育の目的であったとすれば、ペスタロッcherのそれはどこまでも人間の本質を徹底して実現することであったと言える。道徳と宗教との内面的連続性を信じた彼にとってはそれは当然なことであり、彼が自然と言い、合自然的法則を説いたのは、このような立場からであった。

さて、所与における本質的なものの内面的発展、或は自己陶冶のなかに教育の使命を見ようとしたペスタロッcherの立場から言えば、教育はこの本質的なものの発展過程として、一方において自己創造的自己形成と、他方、他者による有意的計画的教授を予想する。しかも両者は互に浸透しあい、教師と児童との交渉は、単に意識的に行われるばかりでなく、しばしば半意識的に、或は無意識的な関係において行はれ、しかも、むしろこの半意識、或は無意識のなかにこそ人格の内容にとって根源的なものが存在するのである。ペスタロッcherが説いた愛や信仰をこの立場において考えることは左程無理な推論ではない。彼が説いた自然の陶冶 *Die Bildung der Natur* がそれを我われに教えるであろう。自然の陶冶は、深く人間本性、神性の陶冶に至らざるを得ない。そうして、この最も内面的な陶冶の場合を、子どもに最も近く、最も卑近なところに、たとえば父母の家、即ち、家庭関係において見ようとしたところに、ペスタロッcherの高貴なる通俗性、平常性がうかがわれる。いと高きものが、いと近きところに見られ、解き難く超え難いものが、平常の愛と信頼の生活の中に実現すると考えられ、そうして、教育のアイデアがこのような最も具体的な教育現実において見られようとする。自然

のもつ多面性、多義性は却って具体的根源性として教育の事実を証明しようとする。一見、そこに何らの系統なきが如く見え、しかも枯渇することを知らない陶冶の泉が、滾々として湧き出るのを我々はしみじみと感ぜざるを得ない。苦節80年の彼の生涯は、このような教育の泉によって常に潤され、常に新らたに、しかも純粹であった。彼の説いた自然が、彼の人格の「自然」を反映して余りありと言わなければならない。

終章

人間教育についてのペスタロッターの考え方の中に、我われは二つの異った人間像をさぐることができる。一つは現実態における人間であり、それは多くの場合、貧しき人びとや悪しく教育された人びとへの深き愛情に根ざしたその甦生の計画としての教育論を呼び起こし、他の一つは、そのような際にも、つねに背後に描かれている理想の人間像であり、全人的調和的人間形成の理念を生んだ。この二つの人間観はペスタロッターにおいては常に結合した形においてあらわれる。従って人間陶冶の基礎理念は何れの場合にも透徹した一つの傾向をもっている。我われはそれを「ゲルトルートは如何にしてその子らを教ふるか」の中に明確に見ることができる。

「私がこの民衆を見れば見るほど、いよいよ私は民衆のために書かれた本

第2章（註）

- 28) Pestalozzi, J. H. Ansichten und Erfahrungen, die Idee der Elementarbildung betreffend, Ausgewählte Werke von F. Mann—S. 346
- 29) 30) Ibid—S. 348
- 31) 32) Ibid—S. 352
- 33) 34) 35) Pestalozzi J. H. Methode
- 36) 37) 38) Pestalozzi J.H. Abendstunde eines Einsiedlers—S. 10
- 39) Ibid—S. 312
- 40) 41) Ibid—S. 31
- 42) Ibid—S. 15
- 43) Ibid—S. 10
- 44) 45) 46) 47) Ibid—S. 11

の中では強く流れていると見たものが、村や教場で観察しますと、まるで霧のように蒸発してしまい、そのためじめじめした陰気さは、民衆を濡らしもせず、乾かしもせず、しかも昼の恵みも夜の恵みも与えないという事実を見るのです。私が実際に行われているのを見た学校教育は、多く庶民と最下層の民衆階級にとって、少くとも私が見た限りでは全く何の役にも立たないということを私は隠すことが出来なかったのです。

私の知った範囲では学校教育というものは最上層は高級な完成した芸術に輝いてはいるが、極めて僅かな人達だけによって占められている一つの大きな家のように私には思われました。中階にはいくらかの者は住んではいるが、その人達が人間らしい仕方で上に昇り得る階段がないので、もしたれかが必要に迫られて上の階に昇ろうと考えてもしたら、見つかり次第にそれ相当な罰をうけ、場合によると昇る時に使用した腕や脚を切断されることすらあるのです。そうして最後に最低の階層には多くの人畜群が住んでいて、彼らは日光と新鮮な空気に対しては上に住んでいる者と同じ権利を有ってはいるが、窓のない陋屋の不快な暗らさの中に放置されているばかりでなく、更に加うるに目隠しや目つぶしで彼等の目はこの上階を仰ぎ見る力を失ったものとされているのです。⁴⁸⁾」

貧しき者に対するペスタロッチーのこのような同情や義憤は、しかし、決して何等の方法を伴はない空しい絶叫ではなかった。彼はこのような人々を陶冶し、真の意味で救済する教育の方法として次のようにその信念を述べている。

「友よ。事物のかかる見解は、当然私を、ヨーロッパの大部分の人間を去勢しているこの学校の罪惡を単に糊塗するだけでなく、その根本から治癒することが重要かつ緊急であり、従ってこの基準の半分は2皿目には1皿目の作用を抑え得ないばかりか、2倍もの作用をするに違いない毒物になり易いものだという確信に導きました。私がそのようなことを望まなかったのは勿論です。そのうちにかの人間の精神が感覚的直観から明晰な概念にまで高まる基準である永遠の法則にあらゆる教育の機械的形式を従わせない限りは、こ

の学校の罪惡を大規模に永続的に除去することは、本質的に不可能であるという感情が私の内に日増しに芽生えはじめました。⁴⁹⁾そうして、このことは彼の教授論の中心課題である合自然的方法、調和的方法となつてあらわれたのである。それは明らかに人類の發展の過程と人間個人の成長の過程、並びに教授の進行する過程とを同じ体系の同じ方向への方法に包もうとするペスタロッチー独自の見解であつたと言わなければならない。貧しき者の救済を教育に於て認め、その方法を直ちに万人に通ずる方法——階級を超え、世間的貧富を超えた、言わば普遍的原理に基づいた方法に求めたことは彼の如き愛と方法との具現者にしてはじめてよくなし得るところであろう。人間の尊嚴についての不動の信念が彼をしてそうせしめたのである。

彼は當時の教育を批判し、つぎのように述べている。「その方法が良い教師、靴屋、商人、兵士を育てることは可能であるということを私は否定するものではありませんが、高い意味において一人の人間である裁縫師や商人を育てあげることができるということは否定せざるを得ません。⁵⁰⁾「一人の人間である裁縫師……」我われはこの言葉に注意しなければならない。ここにいう「人間としての……」は直ちにつぎの言葉につながる。「われわれはただ綴字学校、筆記学校、ハイデルベルグ学校のみをもっているのです。そうして、ここで必要なのは人間学校⁵¹⁾なのです」

人間の尊むべく信頼すべき本性が、ただちに、その教育の出発点となり、中心点となりまた推進力となるばかりか、方法上の課題もそこから説かれ、そこに帰一しようとしていることを、われわれは「ゲルトルートは如何にしてその子らを教ふるか」のなかに明確に読みとることができる。人間性の尊嚴を確信して揺るがない立場が人間救済の発願となつてあらわれ、その救済の方法が人間の教育、人間学校の要請として方向づけられ、その教育方法が、同じ人間性の合自然な道行によって打ち立てられるという二重の構造をそこに見ることができるのはこの書を繙く人びとに与えられる喜こびであろう。

ペスタロッチーは愛の人であつた。如何にして合理的に、方法的に人の子

を導くかに終始した彼の教育の「メトード」の根柢には、つねに湧き出でて枯渇することを知らない愛の泉があった。数多い彼の著書に触れて我われはそれがはたして「方法の書」であるか、或は「愛の書」であるかに迷わされるのである。

終 章（註）

48) Pestalozzi, J.H. Wie Gertrud ihre Kinder lehrt—S. 179

49) Ibid S. 179~180

50) Ibid S. 255

51) Ibid S. 275